
IS インフィニット・ストラトス ~大切なものを奪われた少年~

リオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス ~大切なものを奪われた少

年~

【Zコード】

N3679N

【作者名】

リオ

【あらすじ】

世界の兵器がISになつた時には世界の常識も変わつた
インフィニット・ストラトス

IS操縦者の育成機関、IS学園に世界で一番田にISを動かした少年、沖野一馬が学園へと入学する

彼はこの学園で何を感じ、何を学ぶか

今、物語の舞台の幕が上がる

初めに

この作品は原作 I.S の作者リオが考えた二次創作です
注意

- ・オリジナル主人公は束が嫌いです。束は俺の嫁派の方
- ・多少話は違つたりする事がが多いです。 ですので原作遵守派な私は
読まん。 方

・I.Sなんか大嫌いだあ！！の方

・オリジナルキャラが嫌いな方

・主人公機は若干チートです。 チートは好きじやない方

・更新が鈍速でこれ以上待てるかあ！の方

は見ない方が宜しいかと思います

それでも見たいという方はどうぞ此方へ

では、始まり始まり

第1話 教室にて（前書き）

原作だとショートホームルームまでの間の話です

それでは、どうぞ

第1話 教室にて

【教室内】

「…………」

廊下側2列目の1番後ろの席に座っている男子生徒、沖野 一馬は黙つて辺りを見渡す

一馬と廊下側3列目1番前に座っている男子生徒、織斑 一夏以外この教室にいるのは全員女子生徒のみ

一馬と一夏をチラチラと見てている視線がチラホラと女子生徒があり、そんな中一馬は

「（……暇だな）」

何時担任の先生が来るか分からず、正直暇を持て余していた

「（……そう言えば、チーフが学園に着いたら読めとか言つてたメモがあるから、それを今のうち見とくか）」

一馬は制服のズボンのポケットから一枚のメモを取り出し、内容を確認すると

困ったことがあるのなら、学園の更織 櫃無に尋ねとけ。力になつてくれると思う

清音より

「（更織…櫃無か。今は気にしなくても良いか）」

と一馬がメモの内容を確認すると1人1人の先生がやって来た

「皆さん、入学おめでとうございます。私は副担任の山田 真耶です。一年間よろしくお願いしますね」

と山田先生は笑顔で言つていたが、辺りはシーンとし、誰の返事もない

「ええっと。じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。では、出席番号順で」

と山田先生の指示で出席番号順に生徒は自己紹介をして、次は一馬の出番となつた

「次は…沖野一馬くん」

「はい」

一馬は返事をした後に席を立ち上がるとクラスの生徒全員が一馬を見ている。一馬は余り慣れない視線に動搖せずに喋る

「どうも、沖野一馬です。中学の時は名字で呼ばれてたんで、そっちの方で呼ばれると有り難い。とりあえず、これから一年宜しくお願いします」

最後に一礼すると大きくはない拍手が起き、当たり障りのない一馬の自己紹介が終わると次は織斑一夏の番となる

「え……えっと、織斑一夏です。宜しくお願ひします」

一夏の自己紹介は一馬よりも短く、以上ですと言った時には、何句なんかの女子がずつこけた

「（まあ、根暗と思われたくないくて無理矢理終わらせたって感じだな。……ん？）」

1人の女性が出席簿らしきもので一夏の頭を叩く

痛そうに頭を押さえ一夏は振り返ると

「げえつ、関羽！？」

女性は次に角で叩いた

「誰が三国志の美髯公だ、馬鹿者」

因みに一夏の頭を叩いた女性は織斑 千冬。IIS業界では知らぬ者はいない…はず

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたのですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

頭を押さえうずくまる一夏を後日に真耶と一言交わした後、千冬は教卓の前に立ち喋り始めた

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を1年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15歳を16歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うこ

とは聞け。いいな

千冬がそう言つと、教室は静まり返る、そしてじばりへかると

『キヤ！ 千冬様、本物の千冬様よー。』

「（うおつー？ 涙い声量だな）」

千冬が現れたことでクラス中の女子は黄色い声を上げて、その中で一馬は内心で驚きながら耳を塞いでいた

まるで鼓膜が破れそうな位声量がヤバいのである

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！ 北九州からー。」

「あの千冬様にじこ指導いただけるなんて嬉しいですー。」

「私、お姉さまのためなら死ねますー。」

1人危ない奴が居たような気がしたがそれは置いとき

「はあ……まつたく毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラス、だけに馬鹿者を集中

させているのか?」

と、黄色い声が聞こえるなか千冬は溜め息をついたのだった

その後に一夏と千冬の関係が姉弟と分かつたとき周りは

「え……? 織斑くんって、あの千冬様の弟……?」

「それじゃあ、男子で『EIS』を使えるっていうのも、それが関係して……」

「でも、沖野君の場合どうなるの?」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ」

女子達が騒ぐが千冬はスルーをする

今の世界の兵器は戦闘機や戦車ではなく、インフィニット・ストラトス（略称：EIS）と呼ばれるパワードスーツ。EISは今までの兵器を遥かに超えた存在でどの世界にもあるのが当たり前。但しEISは女性にしか動かせない筈なのだが、例外が一馬と一夏である

理由はそれぞれ不明で動かした本人達も分かつてない状況なのだ

説明は以上で、騒いでいるなか一馬は誰にも聞こえないように呟く

「今年の一年は騒がしくなつたんだな」と表情は呆れながらも少し面白気がこころよひで見える

第2話 代表候補生

【教室内】

「……はあ」

一馬は溜め息を吐く

その理由は教室内、廊下に多くの女子生徒が一馬を見る視線。話しかけようとするが、互いに牽制しあって中々動かない

一馬自身、女子と話すのは苦手ではない。軽い会話程度なら普通に出来るんだが、誰も動こうとはせずに一馬を見続けられているのは正直辛い

先程まで一夏も見られていたんだが、ポニー・テールの女子生徒と一緒に教室から出たのである

「誰か、この状況を何とかしてくれ」

一馬は2度目の溜め息を吐く。一馬の願いが叶ったのか、この状況を打破する女子生徒が現れた

「うふつともうじて？」

「……？」

左から声が聞こえ、左を向くと金髪にすこしロールをかけた女子生徒が立っていた。色白や顔つきから歐州系の人だと思つ

そして一馬はこの女子生徒の名前を覚えていた。自己紹介で一夏ほどとは言えないが目立つていたので印象に残つている

「確か…イギリス代表候補生のセシリア・ウォルコットだっけか？」

「オルコットですわ！あなた失礼でしてよーー！」

訂正。一馬は名前は完全には覚えてないようだ

「今のは俺が悪かった。すまない。それで、セシリア・オルコット。俺に何か用なのが？」

「まあ！なんですの、そのお返事。私に話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度と言つものがあるんではないかしら？」

「（…めんどくさい奴に当たったな）」

「この手の相手は正直面つて苦手だと、繩は迷つ

因みにエスは女しか使えず、そのため世界は「女＝偉い」といった構造となっているために女性はその利点につけ込んで、男を奴隸の「」とく利用している

男は刃向かえれば最悪濡れ衣着せられ、確証が無いまま豚小屋行きな不条理な扱い

男の誰しもがこの世界は歪んでると思つていいはずだと

話は戻すが一馬はこの場をやつたらとやつ過ぎじたかったため

「だが、もう少しで授業だ。早めに終わらせた方が良いんじゃない
かと思うんだが？」

「確かに一理ありますわね」

セシリアが咳払いを一度した後しゃべった

「この私みずからつて聞いてますのー?」

「ん?ああ、すまない。そう言えば次の授業の準備をしてなかつた
なと思いだして、準備していたのだが…それで、何を言おうとした
んだ?」

一馬の質問にセシリ亞は俯き、体を震わせている。怒つているよつだ

そしてセシリ亞が何かを言おうとした時チャイムが鳴る

「ふんっー。」

セシリ亞は一馬に何も言わず、自分の席へと戻つていくのを確認すると安堵の溜め息を吐き、次の授業にのぞんだ

「 であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によつて罰せられ 」

真耶が教科書を読み進めていき、生徒達はノートを取つていて、一馬もそのうちの一人である

ただ、1人だけ違う奴がいた。一夏だ。一夏から全く分からないと
いうオーラが出ていて、それを一馬は感じ取つていた

気持ちが分からぬ訳ではない。女子生徒はISに関する授業があるから大抵は分かる。しかし、男子は全く教えられない為に1から勉強しなきゃならない

だが、入学前に渡された参考書を使って勉強すればいけるはずなの
だが

「織斑君。今の場所で分からぬ場所がありましたか？」

「はい」

「どいですか？なんでも訊いてくださいね。何せ私は先生ですから」

真耶は教科書を読み進めていくのを止め、一夏に大丈夫かと聞いてくる。

良い先生だなと一馬は感じたと同時に動きがかわいいなど感じていた

そして一夏は少し迷つていて、何かを決意しハツキリと言った

「ほんと全部分かりません」

その一言は周りの空気と真耶の表現を変えるほどの威力である。一

馬も若干驚いている

「ぜ、全部ですか…えっと、織斑君以外で今の段階で分からないと
いう人はどれくらいいます？」

真耶の質問に誰も手を挙げない所が微動だにすらない

「お、沖野君は大丈夫ですか？ついてこれでます？」

同じ男だがこいつは大丈夫であろうと思われてゐるのだなと一馬はそう思つてゐる。周りの視線もそんな感じだ

まだ、一馬は真耶の質問に答えてないので大丈夫ですの表情で答えた

「俺は今のところ大丈夫ですの気にならないで下さい」

言つたら真耶は安堵、一夏は驚愕の表情を浮かべていた

「…ちなみに織斑。入学前に渡された工事の参考書は読んだか?」

千冬の質問に一夏は迷わずこいつ答えた

「古い電話帳と間違えて捨てました」

「(捨てたあー!?いやいや、訳が分からぬ。ビツヤツたら電話帳と間違えんの!?)表紙で分かるだろ)」

一馬の内心でのジックリをしてみると千冬が一夏に出席簿アタックを決めた

「痛あつ!?

「必読と書いてあつただろうが、馬鹿者。織斑、再発行してやるから一週間で覚えろ」

一夏は無理だと言つてたが、千冬が凄みを見せたので了承し授業は再開された

「さてと」

授業が終わり今は休み時間。一馬は一夏にファーストコンタクトを取ろうと思い、行動した

「大丈夫か織斑？」

「大丈夫じゃない」

一夏は机に突っ伏していた。先程の授業がきているのだろう

一夏は起き上がり、一馬の方を見て何か言いたうなうので推理してみた

「名字は分かるが名前は分からない…とか?」

「やうやう。そつなんだよ。えーと」

「一馬。沖野。一馬だ。織斑」

漸く分かり一夏はホッとしていた

「やうか一馬か。なあ、一馬つてよんでも良いか？俺のこと一夏つて
よんでも良いか？」

一馬は迷つたが、此処は了承した。折角の行為を無駄にしたくはない

「とつあえず同じ男のHを乗りとして宜しく頼む一夏」

「ああ、此方こそ宜しく」

田口紹介も済ますとあの女子生徒が現れた

「ちよつと、宜しく？」

「…お前か。セシリア・ウォルコット」

「オ・ル・コ・ツ・トですか？」

現れたのはセシリアでなんだか変なコント?をやっている

「一馬、知つてんのか?」

「さつきの休み時間に話しかけられた

「途中で話しごとくされましたですか?」

セシリアが一馬と一緒に会話を割り合っている

「んで、俺達に何か用か?イギリス代表候補生やんよ?」

「…なあ、一馬。聞きたい」とある

「なんだ?」

一夏の質問に一馬は聞くことにした

「代表候補生って何?」

「そう言えばお前、捨てたんだな参考書。代表候補生ってこいつのは

一夏の質問は2人の時間を一瞬停めるほどの威力はあった

「国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されるHコートのことですわ。…あなた、単語から想像したらわかるでしょう」

「…そういうわれればそうだ」

一馬は一夏が外人に母国語についてツッコまれるのはどうかと思つていて口には出さなかつた。それが一夏の名誉の為である

「本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡なのよ。その現実を、もう少し理解していただけん?」

「そうか。それはラッキーだ」

「なるほど。それはすこいな」

「…貴方がた、私をバカにしていますの?」

一馬はしてゐるが、一夏は知らない

「いや。全然」

「幸運だつていつたの、そつちじやないか」

とうあえず一馬は「まかしたもの

「まあ、いいですけれど。大体織斑さん、あなたHSについて何も知らないいくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でHSを操縦出来ると聞いていましたから、少しくらい知的を感じさせるとかと思っていたけど、期待はずれですね」

「俺に何か期待されても困るんだけど」

「ふん。まあでも、私は優秀ですから、あなたののような人間にも優しくしてあげますわよ」

「（相変わらず聞いてりや、癪に障る言い方だなおい）」

「馬は」の場をやり過げするために黙つて聞き続けた

「HSのことで分からぬことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げても良くなつてよ。何せ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一を強調するセシリ亞だが、此処で残念なお知らせがやつて来る

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「…俺も」

一夏は分からぬが一馬は負けそうだったが何とか勝ちを拾つた。記憶を思い出す。一か八かの賭けで当たり、そこから攻めた結果勝つたのだ

「じゃ、じゃあ私だけたおしたつていいの?」

「〔女子限定〕つてオチだな。一夏、悪いがチャイム鳴りそうだから先に席に戻る。あの出席簿アタックは食らいたくないしな」

「お、お!」

「ちよつとーそういうつて逃げ…」

セシリ亞が言い切る前にチャイムが鳴った

「くつ…いいですか!またあとで来ますから、逃げないでください!」

一馬は断ると聞いたかったが、セシリ亞はスタスターと席についたため言えなかつたのであつた

第2話 代表候補生（後書き）

如何だったでしょうか第2話

実はこれ3回目のは降なんですね

1回目は実験

2回目は手違いで消去

3回目はバックアップなしの記憶を頼りに制作し漸く完成しました

大変だったなというより自分のミスなんですね（汗）

次回話はセシリアに決闘を申し込まれる話です

因みに一馬がTGSを動かした理由はまだ先になりますのでご了承下さい

以上リオでした

第3話 決闘予告（前書き）

今回の話のリストに原作ではまだ早いあの方が登場です

第3話 決闘予告

【教室内】

「それではこの時間は、戦闘における各種装備の特性について説明する」

今まで教壇には真耶ではなく千冬が立っていた。大事なことなのか、真耶までノートを手に持っていた

「ああ。その前に再来週に行われるクラス対抗戦にでる代表を決めないとな」

ふと、千冬は思い出したかの様に呟つ。忘れていたんだろうが、言うには重要な話なのだろう

「クラス代表はそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会が開く会議への出席…クラス長だな。一度決めたら一年間変更はないからそのつもりで」

「（興味ないな。俺はパス）」

と一馬が思つてゐるなか

「はいっ。織斑君を推薦しますー。」

「私もー。」

と一夏が候補に挙げられる

「では候補は織斑一夏。他にはないか?自薦他薦は問わないで」

「つて、俺えー!?

「織斑、席につけ。邪魔だ。さて、他に居ないのか?いなければ無投票当選だぞ」

「いや、俺やらなー。」

一夏は拒否するが、千冬は一夏をひと睨みし

「自薦他薦は問わないと言つたはずだ。選ばれた以上、覚悟を決め
る」

「うう……」

「（ドンマイだな一夏）」

一夏が選ばれそうになつてゐることを一馬が他人じとと思つていたとき

「でも、沖野君もいいかも」

「あつ、私も沖野君に推薦します」

「（なつー？）」

一馬は驚いた表情しながら推薦した女子生徒を見る

「ふむ。ではもう候補一人目は沖野一馬。他に居ないのであれば、この一人への投票になるだ」

一馬は辞退したかったが、一夏の様になると想い腹を括つたが

「待つてくださいー納得がいきませんわー！」

セシリ亞が机を叩きながら立ち上がり納得しないのか抗議する

「そのような選出は認められません！だいたい、男がクラス代表な

「（なんなこと）言つながら、やりたつて言えれば良いのにな）」
「（やんじやるのですか？）

「（やんじ）と申つながら、やりたつて言えれば良いのにな）」
「馬はため息吐きながらやんことを思つていた

「実力から行けば私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからといつ理由だけで極東の猿になるのは困ります！私は、このよつな島国までヨーロッパ技術の修練に来ているのであって、サーフィンをする気は毛頭ございませんわ！」だいたい、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないと血体、私にとつては耐えがたい苦痛で」

言い放題だなど一馬は思つていた時

「イギリスだつてたいしてお国自慢などいだる。世界一まざい料理で何年覇者だよ」

「なつー！？」

「（やつちまつた）

一夏がセシリアの祖国を侮辱したのか、セシリアの表情がワナワナとしている

「あつ、あつ、あなたねえ！私の祖国を侮辱しますのー？」

「（…マズいな）」

一馬は2人を停めようと立ち上がる

「2人とも落ち着け」

「止めるなよ一馬。今、俺は凄くムカついてる」

「ええ。私もですわー！こんな猿に祖国を侮辱されるなんて許し難いのに」

「…一言言つておく。原因作ったのはオルゴットだぞ」

一馬が言つた時、セシリアは一馬をがん見する

「私が悪いー？私は悪くはないですわー！」

一馬は悪びれもないセシリアに今まで我慢していたものが流出する

「…なら問わせて貰う。イギリス人は傲慢ちきで他人を侮辱するし

か能がない人種なのか？」

「なつ、なつ！？」

セシリアは驚いていたが一馬は氣にもせず暴言を吐く

「今まで黙つてりやいい氣になつて。私は悪くない？お前が最初に問題を起こしたんだろうが！なのに悪びれもせずに次から次へと高圧的なこと言いやがつて、代表候補生だからといって言い過ぎなんだよ！！」

一馬は我慢できなかつた。この女は女+候補生といつ歪んでいる権利で偉ぶつている女に過ぎないと

「あ、あなた私を侮辱してますの！？」

「現にしてる。気づけよ

セシリアはワナワナと震え、次に取つた行動は

「決闘ですわ！」

なんでそういうか分からぬが、一馬も一夏も同じことを考えてた

「俺は構わない」

「おう。いいぜ。四の五の言つよりわかりやすい」

「さて、話はまとまつたな。それでは勝負は一週間後の月曜日。放課後、第3アリーナに行つ。オルコット、沖野、織斑の3名はそれぞれ準備をしておくよ。」では授業を始める

千冬は締めくくつて授業が始まった

「あー。なんで、あんなこと言つちまつたんだろう」

日はあつと晴れ間に過ぎて放課後、一夏は顔を机に突つ伏し落ち込んでた

「腹括れ一夏。決まつてしまつたのは変えられない」

しかし、セシリアは代表候補生。エリートなのである。対して一馬は今の実力で勝てるか多少の不安は抱えていた

「一馬は大丈夫なのか?」

「正直言えば不安だな」

「お前もか」

一夏はほっとしていたが現実みろよと言いたくなつたのは置いとき

「ああ、織斑君、柳瀬君。まだ教室に居たんですね。よかったです」

と入ってきて俺らに言つてきたのは真耶であった

「あ、山田先生。どうしました？」

「えつとですね…寮の部屋が決まりました」

真耶は2人に寮の鍵を渡す。よく見ると、部屋の番号が違う

その後、真耶は2人に寮内の説明を受け終わり早速寮内に行つてみることにした

【寮内・一馬の部屋】

「個室でも結構広いな」

一馬は渡された鍵で部屋のドアを開け、部屋を見た第一声があれである

部屋には大きめなベッド。机、シャワールームやトイレ、更にコンロもあり、そこからビジネスホテルでも豪華なきがする

「それで」

一馬は机に付いている椅子に座つて、鞄から1冊の小さなノートを取り出す。そこには「EVA関連ノート」と書かれていた

一馬はノートに何かしらをシャーペンで書き始めてから数分後、誰かがノックする

「どなたですか」

と一馬はドアを開け相手を見ると水色の髪をし、赤い瞳をした女子生徒である。よく見ると、リボンの色で2年生だと分かった

「君が沖野君だよね？」

「そうですが、どちら様でしょつか？」

いきなり名前は失礼かと一馬は思っていたが、その女子生徒は問題
がなさそうでこいつ言つた

「私は更識 楠無。清音さんに宜しくって言われて様子見に来まし
たあ」

一馬は渡されたメモに更識 楠無の名前が書いてあったのを思い出
したのであった

第3話 決闘予告（後書き）

如何だつたでしょうか第3話

えつ？ 横無の出番が早いだつて？

良いじゃ不出したかったもの。ネタバレだけど妹さんも出すの早いよ

さて、次回話はオリジナル話になる予定です

それとおこがましいですが、此方への感想宜しくお願ひします

第4話 篠屋内にて（前編）

今回の話はオリジナル話です

では、どうぞ

第4話 部屋内にて

【寮内・一馬の部屋】

「粗茶ですが、どうぞ」

「おっ、ありがとね」

一馬は櫛無を部屋に入れて茶を出し、気になることを質問する

「いきなりなんですが、更識先輩とチーフってどんな関係なんですか？」

「清音さんと私の関係？ そうだね……親戚みたいなものと、私の工房の製作場を提供してくれた間柄とでも言つておこつかな」

「私の工房って、もしかして代表候補生なんですか？」

一馬は更に質問するが

「な・い・しょ」

と言つて櫛無はウイーンクをとる

一馬も、食いつかず引き下がる。チーフ（清音）もやり方は違うが似たよつなことをしていたので、これ以上聞いても無駄だと悟ったのだ

「逆に」ひづが質問するけど、沖野くんはびつやつて手を動かしたのかな？」

更識は一馬に近づき、顔と顔との距離は近く一馬はかなり緊張している

「あ、チーフに聞いてくれませんかね？お、俺、の口からじやい、言いたくないんで」

「…うん。分かった

楯無は一馬から離れ一馬がホツとしたのはつかの間、楯無が沖野君と呼び

「私が近づいたとき、ドキドキしたでしょ」

としたり顔で言われ、一馬の顔が一気に赤くなる

「アハハハハハ！ 図星なんだ。素直で可愛いね沖野君は」

「つー？」

一馬は穴があつたら入りたい気持ちで一杯になる。そして、この人には勝てないなとまた悟つてしまつた

「さて、話は変わって風の噂なんだけど沖野君と織斑一夏君が君のクラスにいるイギリス代表候補生と決闘するつて聞いたんだけど、本当かな？」

「本当ですよ。一週間後に決闘をやることに決まりました」

一馬は落ち着かせながら茶を飲む

「へえ、噂は本当だつたんだ。それで勝つ見込みは？」

相手は代表候補生。エリートなのである

一馬＆一夏とセシリ亞では差が大きすぎる筈

だが、一馬は

「勝ちます。勝つ見込みはムズいですが勝ちます。俺と「打鉄・零

式」は「

一馬の宣言と同時に首に巻かれているチョーカーの宝石の部分が一瞬光ったかのように見えた

【寮内・セシリ亞の部屋】

「全く、最悪ですわ」

セシリ亞が一人シャワールームで、シャワーを浴びながら悪態を付いていた

原因は2つ。一つは織斑 一夏、もう一つは沖野 一馬。特にセシリ亞が腹を立てていたのは一馬の方である

「人の名前を間違えるわ、祖国と私を侮辱するわ、本当に最低ですわね」

セシリ亞は一馬に言われたことを思い出す度にイライラは募っていく

しかし

「（ですが、今までの男達とは違いましたわね）」

セシリ亞が会つてきた男達はオルコット家の莫大な財産田当てだつたり、媚びを売つてゐる者だつたりと顔色ばかりうかがう者であつた

だが、一馬と一夏は侮辱はしたが顔色を窺つたりはせずに自分に言いたいことを言つていた

「（ですが、そんなことはどうでも良いですわ。今度の決闘で勝つのは私、セシリ亞・オルコット。この私が勝てば、きっと他の男達と同じようになるんでしょうから）」

セシリ亞は先程思考をシャワーで浴び流すように浴びていた

【寮内・一馬の部屋】

『まさか、イギリスト代表候補生と決闘を申し込まれるとはね』

部屋は再び一馬の部屋に戻つて、樋無がいなくなつてから数時間後に一馬は携帯電話で会話をしていた

受話器越しにちらほな女性の声が聞こえる

「さうか？あんたにとつちや、どつかの代表候補生と闘つことにな

「うじとは予想済みだつたと思つが？」

『違ひない。昔、私の知り合いがあんたと似たことやつていたしね』

電話の女性はケラケラと笑つていた

『そう言えども、メインのあれの最終調整が済みそうでね、決闘までには間に合つてそつだよ』

「そつか。あれが終わるのか。漸くか」

一馬の表情は安堵していた

『ああ、漸くだ。漸く「零式」のデビューがやつてくる。そしてあんたのIJS操縦者としてのデビューだ。…勝てるかい?』

「勝つ。俺の目的、あんたの目的の為にも負ける訳にはいかないからな」

「そつかい。それじゃあ、決闘頑張れよ

一馬はああと言つて電話を切る

「そつだ…俺は負けるわけにはいかない。俺の目的の為に

一馬は携帯を強く握りしめ、此処には居ない誰かを憎んでいた
な表情をしていました

第4話 部屋内にて（後書き）

如何、だつたでしょ？ つか第4話

今回は一夏が篠との「コタ」、「コタ」の最中に一馬やセシリア側の内容を出し
てみました

次回は原作沿いの話になります

これからも頑張って行きますので応援宜しくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3679z/>

IS インフィニット・ストラatos ~大切なものを奪われた少年~
2011年12月28日20時48分発行